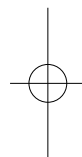


株式会社  
夫婦

代表取締役社長  
下田美咲

sanctuary books



## はじめに

ずっと「結婚は人生の墓場」だと思っていた

はじめてそのことを口にしたのはまだ幼稚園に通っていた頃で、園外保育の道中で同じクラスの女児から「私の夢はお嫁さんになること！美咲ちゃんは？」と訊かれた際に、「え、結婚なんて人生の墓場なのに?！」と返した記憶がある。

「結婚は人生の墓場」を、地で行く大人たちの巢窟みたいな環境で育った。

両親が離婚の話をしているのをはじめて耳にしたのは小学一年生の時で、朝はだいたい同居していた祖父母が怒鳴り合いのケンカをする声で目覚めた。

## ——結婚に成功している夫婦を見たい

「結婚したい」と普通に思えるようになりたくて、「結婚の成功例を一つでもいいから見たい」と考えるようになった。

うまくいっている夫婦を目の当たりにしてみたい。

うまくいっている結婚って何だ。幸せな夫婦って何だ。

想像もつかない。今のところ結婚に敗れている男女しか見たことがない。

**結婚が人生の墓場ではない可能性を、見出したい。**

そうじゃないと私は、この先どれだけ人を好きになっても、最終的にその人を傷つける未来しか見えない自分として生きていくことになる。「好きだけど、でも結婚はしたくない」の破壊力は大きい。嫌すぎる。

そうして、私の研究が始まった。

口癖のように「結婚の正解が見てみたい」「うまくいっている夫婦の実態が知りたい」と言っていると、たまに「うちの親、ラブラブだよ！」と言い出す人がいて、そんな時は「え、見学しに行っていない?！」と言って、実家に連れて行ってもらい、しばらく住んだりした（私は人の家に住み着くのが得意）。夫婦で一緒に入っているお風呂に（その家の娘と共に）突撃して、入浴シーンを見せてもらったりもするくらい、すみずみまで観察した。

だけど、いろんな家庭に潜入すればするほど、私は萎えた。

たしかに怒鳴り合いの喧嘩はしていなくて、セックスレスでもないのかもしれないし、不倫はしてなくて家庭に一途なのかもしれないけど、**幸せそうには見えなかった**。お父さんの圧が強くて、お母さんの意見がかき消されていたり、誰かの我慢とか諦めの先に成り立っているような仮初めの平和空間に見えた。

潜入調査と並行して、よく聞き込みもしていた。

10代の頃から芸能界の仕事をしていた大人との接点は多かったから、子持ちの既婚者に遭遇した時はだいたい「二人目の子どもってどうやって作ったんですか?」と聞いていた。「シラフじゃキツイからお酒を飲んで直前までAVを観てこう、なんとか、どうにかだよ」などの回答を聞きながら『結婚って恐ろしい』という思いが深まっていった。

## ――そんな私が結婚をした理由

結局のところ、適齢期を迎えても「幸せな結婚の形」は見つからないままだった。

「こんな夫婦になりたい! こういう結婚だったらしたい!」という気持ちには一度もなれなかった。いろんなタイプの墓場のサンプルが集まったただけだった。

そんな私が27歳で結婚したのは、独身に飽きたからだだった。

とてつもなくモテることもあり、口説かれることにも疲れた。あと結婚生活には意欲が

なかったけど「結婚式」には尋常ではない意欲があって、友達から手紙を読まれたり、親に手紙を読むイベントがやりたかった。その手の思い出作りは結婚式という大義名分がないと難しい。

私が人生の師匠だと思っている野原しんのすけくん（クレヨンしんちゃん）の言葉に「結婚と離婚を前提に付き合ってください！」というような名ゼリフがあって、「そうか、離婚を前提にすればいいのか!」と思えたこともある。

独身としての青春をさんざんやり尽くした20代半ば、知的好奇心が旺盛な私は、「次の初体験といえば結婚や妊娠や出産や子育てや離婚でしょう!!」みたいな気持ちにもなっていた。

それに。

私が見てきた結婚に敗れちゃってる人たちは、別に結婚に限ったことではなく、人生の何もかもを情性と妥協でまわしていて、誰も全力で生きていなかった。

夢は「叶わないもの」と定義して、「お給料は我慢料」みたいに考えていて、そもそも根こそぎ私とは生き方が違っていた。

大人になるほど、自分とその人たちの違いが浮き彫りになってきて、「私だったら違う結果を出せるんじゃないか」と一縷の望みを抱けていたことも、結婚への後押しになった。

そうして2016年に、私は、当時まだ出会って3ヶ月でセックスくらいしかしたことなかった男性と（食事デートすらしたことがなく、本名も知らなかった）、結婚をした。シンプルに、「さすがに初婚でいきなりうまくいくはずない」と思っていたので、すぐに離婚する気満々だったのだけど、なんと今年で結婚10周年を迎える。

ビックリ。え、私、今世で離婚しないのかな？ そんなことあるかな？

でも何より一番の驚きは、独身の頃より、人生が楽しいことだ。私は今、楽しくて面白くて幸せな結婚生活を送れている。不倫も一度もしていない。セックスストレスになったこともない。

## ——「株式会社夫婦」

10年目を迎える今、つくづく、「夫婦とは運営するものだ」と感じている。

結婚が人生の墓場とか、墓場を超えて地獄とか、そういう風になっちゃっている人たちは、私から見て運営をしていなさすぎる。

夫婦の運営は会社の経営にソックリ、って思う。

会社経営に必要なことといえば、「時代を読む力」とか「メンバーとコミュニケーションを取る力」とか「目的を見失わず、適切な言動を選び抜く力」とか「欲しい未来に向かって戦略的に動く力」とかだと私は考えているけど、結婚を運営することに必要な力もまさにそれ。

結婚における「時代」とは、「変化していく家庭の状況」のこと。

たとえば子どもがいないところから妊娠をすると、「妻の妊婦時代」が始まる（この時点で運営に敗れて破綻する男女が少なくない。第一の鬼門！）。

子どもが生まれると「子どもが乳幼児の時代」がまず始まって、そのうち「幼稚園生の時代」とか「小学生の時代」とか「思春期の時代」とか、いろんな時代がくる。

子どもの成長は、夫婦生活にかなり影響をもたらす。

子どもが生まれることはもちろん、育ってきて手が掛からなくなってくることも家の様子を变えることであって、そういう全ての変化が「夫婦の危機」になり得る。

会社経営には終わりが無いのと一緒に、時代が刻一刻と変わっていく以上、「もうこれで我が社は未来永久に安泰！」なんてことはどんなに大きな企業であってもありえないように、夫婦も、一生攻略し続けないといけないプロジェクトだ。

だって妻も夫も生きてるだけで年齢が変わっていくし、ホルモンバランスも変わるし、生き物として別物になっていくわけだから、さらには社会の変化の影響も受けるし、常に「今の時代に最適な運営」が求められる。

——という前提のもと、私はこの10年間、本気で夫婦を運営してきた。

夢を叶えることと同じくらい、手間暇をかけ、エネルギーを注ぎ、この結婚を人生の墓場にしてしまわないために、離婚したくないようにするために、やれるだけのことをしてきた。

結婚は、「こうすれば必ずうまくいきます！」と言えるほど単純じゃない。

私自身も、この本が出る頃に「新しい時代を攻略できなかった」とかってなって離婚している可能性も0じゃない。結婚は複雑怪奇。難しい。

だけど、少なくとも現時点では。

もう10年も経つわりに、私にとって結婚は墓場でも地獄でもなく、鳥籠の中の鳥でもない自分で「独身の頃より毎日が楽しいな。結婚って面白いな。今が一番幸せだな」と思っている。

いったい何をどうやって、どう運営してきたらそうなったのかっていうところを、この本を通してお伝えしたい。

そう、この本は、過去の自分が誰より探し求めていた一冊です。

「結婚が墓場じゃない可能性を見出したい！」と願いながら、夫婦の研究に勤しみまくる若者だった私が、一組でもいいから目の当たりにしてみたかった夫婦の姿や結婚の形が、我が家にある、と思えているのだ。

結婚に不安がある人、結婚に不満がある人が、「そうか、夫婦ってこうやって運営をすればいいのか！」と希望を見出せるような、株式会社夫婦の在り方を、友達の親の入浴シーンまで覗きに行っちゃうほどに見たがりの私が「このレベルで覗きたかった」という赤裸々さで描き上げていきますので、どうか最後まで、楽しんで、夫婦の運営の実態“を目の当たりにしていただけたら。

**結婚をやりちぎることは、独身でいるより面白い。**

そう思っている私より、エールを込めて。

あなたがいつまでも、結婚したくなるほど好きになれた人と幸せに暮らすためのバイブルになりますように。

## 目次

はじめに　くずつと「結婚は人生の墓場」だと思っていたく  
このエッセイの登場人物

18　02

## 1 章

### 結婚生活は勝手に楽しくはならない

夫とのデートが楽しくなくて、壮大な考え事が始まった春のこと

22

「夫婦だから一緒にやる」じゃなくて、「夫婦でいるために一緒にやらない」

39

結婚が怖いあなたへ　初婚なんて離婚が大前提

52

「あなたのため」ではなく「私が幸せじゃないから」と言う勇氣

59

「距離感の調整」のススメ　自分で用意できるものが少ない人ほど、配偶者に求めるものが増えるのは基本原則

70

命の授業、開幕

83

## 2 章

### 子どもが生まれると夫婦はなぜこんなにもこじれるのか

仮面夫婦にならないために。」どうしても椅子に足をあげたい」と宣言した日のこと

118

家事・育児は「嫌悪感製造機」なのである

136

名もなき家事、「あなたがやらないせいで私がやる羽目に」は勘違い。実は押し付けられて  
ない

138

夫の心を折るのに2年かかった、「子どもの習い事戦争」のこと

146

あなたの気持ちは超どうでもいい。善意のレイプに要注意！

175

### 3章

#### 夫婦が試される男と女の現実

パンツを脱がない性行為の幅が広がれば広いほどよい

「奥さんのことが大好き」なのに不倫をする男の正体

夫婦喧嘩は『謝っておしまい』では危ない嫌いになるか、本当に仲直りできるかの分かれ道のこと

夜這いは情性で応じず本気で断る

探偵ごっこ癖は「結婚は人生の墓場」の入り口

182

190

202

214

222

### 4章

#### 夫婦運営は終わりのないプロジェクト

夫婦運営にマストな「本音を言う技術」

「私はもう、あなたの子どもは産みたくない」人は言えていない本音があると態度で表そうとして変な方向に行く

自分の人生を広げる力、持つてる？

魔の10年目。この結婚、継続するのが正解なのだろうか？

230

242

263

272

おわりに  
　　～言えないタイプの私が、言える妻になったキツカケ～

292

《筆者》

妻・下田美咲／平成元年生まれの37歳

エッセイスト。13歳で芸能界に入り、10代の頃はモデルとして活動。

夫と出会った当時は「コール日本一の盛り上げ女王」の異名で、若者の間で人気を博すタレントだった。仕事柄、夜の世界とコラボする機会が多く、そんな中で歌舞伎町のホストだった夫と出会った。結婚を機に「今みたいな働き方をしてたら好みの男との出会いが多すぎて不倫をしちゃうし、子育てとの両立も難しすぎる」という理由で、兼ねてからの夢であった作家に転向。一家を養う大黒柱。

夫・直也（なおくん・ナオヤ）／1つ年下の36歳

妻と出会って3ヶ月で結婚を決めると同時に夜の世界から足を洗い、サラリーマンとなる。

結婚2年目の時に転職があり、妻から「転職を経験した結果として、転職族の妻として生きていくのは無理だと思い知った。これからもその会社で働きたいなら別れよう」と言われ、退職を決意。「子育てに参加したいし、第二子も欲しいし、あわよくば第三子も欲しい、でもそれは俺が就職してしまうと無理だ」という理由から家庭に入り、主夫生活をエンジョイしている。家事育児はさほど得意ではないので夫婦で分担しつつ、ママ友付き合いやPTA活動などは大得意なので精力的に行っている。

183センチの長身かつ金髪で、ギャル男を経由してきた男特有のかなりゴキゲンなファッションをしているため、近所の人から「あの人は何者なのか」と噂されるのが常。

長男・めこちゃん／小学3年生

ハナムーンベイベー。結婚してすぐの新婚旅行中に授かった第一子。ママをこよなく愛する。

第二子妊娠時に壮絶な「パパ・イヤ……」モードに入り、パパを軽い鬱状態まで追い込むなど、育てやすいわけではない子ども。ゲームと友達付き合いとフラフラプが大得意。

次男・ちーくん（チーペイ）／年長

夫の退職を機に「家庭内に常に大人が二人いるなら、二人目もイケるだろう」と考えたことから作られた第二子。

目を離すとすぐに姿を消すタイプの子ばしこい男児で、安全に育てる難易度が高め。口癖は「ママ大好き」で、長男同様にこよなくママを愛している。大人たちの対応に不条理を感じると「ねえ、それ、育ててないよね?」とツツコミを入れるなど手厳しい。

犬・ぽにゅ（ポメチワ）／3歳

「美咲はオレの女」という認識になっているようで、家の男たちが美咲に近づくと大急ぎで走ってきて間に入り全力で蹴散らすのが日常。とくに夫のことは敵視していて、夫婦がすれ違っただけで吠える。

## 夫とのデートが楽しくなくて、 壮大な考え事が始まった春のこと

それは結婚8年目の春のこと。

私は、ゆるりと、でも深い海に沈んでいくような気持ちで、「夫婦とは…」という壮大な考え事を始めていた。

キツカケは、8年ぶりに夫と二人きりでデートをしたことだった。

2016年の11月に結婚をして、12月には妊娠をしたから、妊娠中はなんかもう色々大怒涛だったし、それで翌年の秋からは家族に長男が加わって、そこからはどこへ行くにも何をするにもずっと子どもが一緒の日々だった。

そんな中で、ついに長男が小学校に、次男が幼稚園に入り、日中の家の中に一人も子どもがいない暮らしが始まった。

私たち夫婦の同居は、第一子の妊娠中に始まったから、胎児も我が子に含めるとすると、ここまでの結婚生活では24時間体制で家に子どもがいる状況だった。

つまり結婚して8年目でありながら、ここに来てはじめて、家の中に夫婦二人きりという状況が発生している。

とはいえ、私は日中は仕事をしているし、子どもたちが園や学校に行っている間は絶好の執筆チャンスタイムだから、暮らしはさほど変わっていないのだけど、子どもが家の中に一人もいない時間が週5であるとか、こうも仕事が捗るのかというくらい捗りまくり、仕事があまりにも早く片付いていくため、「今日は休みを取ってデートでもするか」という気分になる日が、一学期の間に二回ほど発生した。

それで夫と、(妊娠も何もしないフラットな自分としては)もはや新婚旅行ぶりに、二人きりで出かけた。一度目は映画からのランチ、二度目はコストコからのランチに、二人きりで行った。

で、それが、非常に盛り下がる結果となっていました。

盛り上がり欠けるってより、盛り下がった。いや、というか、シンプルに無音だった。主に無音。

で、『夫と二人で出かけるとかいう感じなのか。っていうか二人きりになるとこの人ってこういう感じなのか』って。そして私は気づいてしまった。

夫と話したいことが自分の中に何もない、という事実。

## —— 夫と話したいことが何もない

子どもがらみの報告とか、子どもの保護者としてのミーティングや、「今日の夕飯をどうするか、買い出しをどうするか」みたいな家族会議については話せるけど、それ以外の話題がマジでなくて。

話題がない理由は自分の中が空っぽだからではなく、話のネタになるような想いや考え

は色々あるのだけど、ただ、「この人（夫）を相手に話したい」と思うことは何もなく。『私、彼に対して話したい』『自分の話』が何もないや』ってことに気づいた。

産後初デートとなった映画に出かけた時には、映画館を出た後に、軽く、映画の話をしたけど、もうそれだけでも痛感した。「私たちは会話の趣味が合わなすぎる」と。

子育てを共にしてきたことで、この世で一番、遠慮がない間柄になっているせいもある。親より兄弟より夫には気を使わないし、きつと彼にとっての妻もそうで、今さらオブラートに包んだリアクションをできる関係にない。それは親の前でセックスをするくらい気まぐずいし、すごく心地悪い。

そして、会話の相性が悪い者同士が、気遣いゼロで会話をしようとなると、それはもちろん不快なものにしかない。

夫婦間で何かを話そうとすると、夫は私に対して「美咲ちゃんは感受性が乏しすぎる、だから俺の言ってることが分からないんだ」みたいな不満を抱く。

一方、私はそれに対して「あなたの解釈は想像つく気がするけど、私はそれよりも高い解像度で物事を見るから、そういう風に感動をしない…」というような感想を抱く。

お互いのことを「感受性が乏しい人だな」「解像度が低い人だな」と思っていて、**なんかもう交わりようがない感じ!!**

なお、この感覚、一般的には妻と夫、逆な気がするけど。こういう相性の悪さを痛感する中で会話が減っていく夫婦自体は、よくいるように思う。

夫と会話の趣味が合わないことは、出会ってから今までずっとジワジワと感じ続けてきたことだから、今初めて知って衝撃を受けたことではないし、前々から知ってはいたのだけれど、そうと知っている相手と二人きりで出かけてしまった際の話題のなさ、沈黙のどうしようもなさたるや…!

**別に気まずくはないけど、気詰まりではあって。**

つまりのこと、楽しくなくて。

その事実、けっこう打ちのめされたというか、「私にとって、夫と二人きりの時間は楽しくないのか…私はもう、この人のことを楽しめないのか」と思ったら、「それじゃ困るんだよな」と。

添い遂げたいのに、それじゃ困る。

私にとって、二人きりでも楽しめる存在でいてくれないと、困る。

そんなところから壮大な考え事が始まった。

—— **一体、どうやって夫を楽しみ続けられたいのだろうか？**

どうしよう。この人と二人きりで過ごすにあたって、嫌な気持ちにならないためには、今のところ無言でいるしか術がない。

唯一、我が子の話をするのは楽しいし、そういう話題を選べば話せるけど…それしか話

せないって、どうなんだ。

今は子どもたちが幼いし、一緒に暮らしているから、わりと子ども絡みの話題も豊富だけれど、子どもたちが大人になって、自立して家を出ていった先に、今ほど子ども絡みの話題があるとは思えないし、そうなった時に私は、彼と一体何が話せるのだろうか。

私は、夫が思い描いている未来図をなんとなく把握している。

たとえば彼は、子どもが巣立った後も、夫婦二人きりになってからも私と旅行に出かけたいと思っている。

旅先で、子どもたちの笑顔を眺めながら「あああ、子どもたちとの温泉旅行、あと何年楽しめるんだろう…儚い」などと私が言うと、夫は「俺と二人で行けばいいだろ。温泉旅行は一生行けるぞ、え、行かないつもりなの?!」みたいな感じでくる。

そんな夫のことを、可愛い人だと思うし、大切にしたい気持ちはある。

ただ、いかんせん、我々は二人で出かけたところでめっちゃ盛り下がる。

今は、それでもいいけど。あえてデートの時間を作ろうとしなければ、そういう機会はないし、まだまだ子どもを連れて出かける機会が沢山あるから、それだけで十分に夫婦ならではの楽しい時間をシェアできるし、関係が成り立っているし、いくらでも一緒に思い出を作れているし、同じ時間を楽しく過ごせる術がある。

でも、子どもたちが巣立ったら、どうだろう。

夫は私にとって、何要員になるのだろうか。私はどうやって、夫と楽しい時間をシェアすればいいのだろう。

私は夫と何をすれば、この人と一緒にいて楽しい、という感情になれるのだろうか。

二人きりだと厳しいから友達も混ぜれば成り立つだろうか、と考えてみるけど、私の友達と夫は基本的にさほど合わないし、私は夫の気配があると友達との会話にやりづらさを感じる。そして夫の友達は、私にとって面白い人材ではないから、そっち側のコミュニティに混ぜてもらっても退屈に感じてしまう。

——「楽しくないから別れよう」とは思わない

「会話が合わないし、一緒にいても楽しくないから、別れよう」とは思わない。

どうにかこの男を楽しむ仕組みを生み出せないものか、と思う。

そのくらいには、私は彼のことを愛してはいるし、感謝をしていて、大切にしたいと思っている。

私にとって離婚のハードルは、結婚を決めた時から一貫して低いし、私にとって離婚はいつでもできることだし、嫌なことをされたいいつでも切り出すけど、離婚したくなるような嫌なことは何もされていない中で「もっと、会話の相性が合う男と再婚したい！」みたいな意欲が芽生えたりはしないし、夫とのデートが楽しくないからといって「相手を変えればもっと楽しめるはず！ 探せば、一緒にいて楽しい男が他にいるはず！」みたいな歯痒さを感じたりもしない。

私は、会話の相性が合う男とは性的な相性が悪いのもよく分かっているし、話の楽しさは性的魅力にならず、恋愛対象にもならない。

つまり、誰と結婚しようとも同じ。

結婚するほどに男女としての相性が良かった時点で、果てはこうなっていくのが目に見えている。

だから、「選択を間違えた」という風には思わないし、「他の人ならもっとうまくいく」とも思わない。これはもう私自身の性質上とか性癖上、そして精力の都合上、結婚の果てにはこういうことになる。

子どもたちの父親としての彼に関しては不満がないわけじゃないし説教の対象であることも多いけど、夫としての彼には、全然不満がない。いや、すごく細かく言えばあるけど（家事のタイミングとか！）、概ね、本当にすごく良い人だと思う。

こよなく私を愛し、いまだに恋をし、尽くしてくれて、私との結婚に人生を捧げながらも、自分が持っている自由の範囲内で全力で自分の人生も謳歌していて（最近サッカーにドハマリしていて週2で試合をして、ほぼ毎日自主練をし、サッカーのためのピラティ

スも始めている)、私を支えながらも、籠の中の鳥みたいになっ  
ていなくて、キラキラと暮らしているところなど凄く良い。

だから。

私はどうにか、夫と二人きりの時間を楽しむ方法を見つけたい。

『私は一体、どうやって夫のことを楽しみ続けたいのだろうか…』という課題を自分の中に抱えるようになってから、同じく既婚者の人に会うたびに、「旦那さんとの会話って楽しい?」「夫婦って、何すると楽しいの!」などと聞いて回っているのだけど、「旦那(妻)」とは会話がマジで合わない、何を話しても合わない、だから何も話したくない」というのは、けっこうな既婚者あるあるのようで、わりとよく「だよね!!」と意気投合する。(夫婦の会話が盛り下がっている分だけ、知人友人との会話は盛り上がる現象が起きる!)

だから、この課題を抱えている既婚者の人は多いのだろうし、今後抱えるタイミングを迎える読者さんも多いのではないかと思う。

### —— 私が不倫をしない理由

なお、配偶者に楽しさを見出せなくなった先に、不倫で気を紛らわしていく人はすごく多い。だけど私は、それはするつもりがない。

なぜかといえば、私が倫理観にお堅い人間だからでなくて(全然堅くない)、シンプルに、きつと私は楽しめないから。

不倫ってさ、自分の中にそれを正当化できる理屈がないと、快楽より罪悪感の方が大き  
くて楽しめないと思うんだ。

周りの不倫している人の話を聞いてもやっぱりそうで、みんな、配偶者への不満を、不  
倫を正当化する理屈にしている。だからこそ、不倫に踏み出せているし、罪悪感に襲われ  
ることなく快楽を満喫できている。

私は、夫との結婚生活の中に、不倫をしてもいい理由が見当たらない。

私の中には彼を裏切ってもいいと思える理屈がなさすぎて、この結婚生活の中で私が不倫をしたとすれば、それは100…0で私が悪い。何も彼のせいではない。

私は、何も悪くない人を傷つけてまで、楽しみたいことがない、というか、楽しいと感じられないと思う。

それに、「こんな結婚生活じゃ、不倫してもいいでしょ」と思えるほどの不満を夫に対して感じることもあるのであれば、離婚がしたい。不倫で誤魔化すのではなく、離婚して仕切り直したい。

だから、やっぱり不倫をする発想にはならない。

私の幼少期は、100…0で私は何も悪くないのに、傷つけられる日々だったから、そういう意味不明な暴力を人に振るうことは絶対にしたくないし、できない。どれだけ辛いか分かっているのに、できるはずもない。

だから、「夫といってもつまらないから外で楽しんでバランス取ろうっ」という発想

にはならないから、「なんかさ〜調理法とかで、どうにかならない？この素材、まだまだ美味しく食べられる方法ないのかな？研究すれば見つけられるよね？」という発想になる。

夫自体に嫌気が差さない限りは、夫を美味しく食べ切っていくことに、こだわりたい。「で、どうやって」ってところを、最近ずーと頭の片隅で考え続けている。

お得意の、いろんな人に聞き回るリサーチも、進めている。

———そこまですて一緒にいる必要があるのか

まだ新しく子どもを産む可能性もあるし、私たち夫婦が本格的にその壁にぶち当たるのは、15年とか、もしかしたら20年以上先のことで、差し迫った課題では全くない。

当面はほとんどのシチュエーションに子どもが参加してくれているし、子どもの話題だけで間を持たせることがいくらでもできるし、会話ができなくても家族会議に追われてお

けば何とかなる。

だから私は、15年後20年後に本格化されるであろう問題に備えて、ここからずっと考え事をしていくつもりだし、何かアイデアが浮かんだら試していくつもり。

たとえば、しつぽり温泉旅行は会話がなさすぎて楽しめなくても、雪山で本気を出してウィンタースポーツとかすれば楽しめるような気はするし。

結婚した相手と情性ではなく添い遂げるって、多かれ少なかれ、こういう努力をしていくことのような気がする。愛しているだけで楽しめるものではないから、どう楽しむかを考えて工夫して、一緒にいることを楽しみ続ける。

一緒にいて楽しい夫婦であり続けるためには、企画力が大事になってくるように思う。

そこまでして一緒にいる必要があるのかと、結婚したことがない頃の私なら思いそうだけど、結婚8年目を過ごしている私は、「あるんだよね」と思う。

そのくらいの思い入れが育つほど、たくさん山の山を乗り越えてきていて、恩もあるし、愛もある。大切にしたい、という意志がある。

結婚当初にはなかったけど、それが結婚生活の中で芽生えた。過ごした時間に比例してではなく、起きた出来事に比例して。してもらったことの分だけ。

私は、夫とこれからもできる限り夫婦でありたいと思っているから、夫と一緒に楽しく過ごす方法がないと困るし、夫が私にとって面白い存在でないと困る。楽しくない、つまらない、面白くない、と感じてしまうと悲しくなる。私、そういうことには時間を使えないタチだし。時間を使える存在であってほしい。

一緒に何をすれば楽しくなれるだろう。

どういうシチュエーションなら、彼の持つモノを面白がれるだろう。

私はここから先、それを探し続ける。それを探したいと思える存在である限り。

——結婚生活を楽しみ続けることは至難の業だけど

結婚生活を楽しみ続けることって、本当に難しいことだと思う。情性でも妥協でもなく添い遂げるって、至難の業。

結婚生活って、どうしたら楽しめるんだろう。

配偶者のことって、どうしたら面白がれるんだろう。

壮大すぎる疑問を抱えながら、ここからの日々を生きてみる。

それに、私にとってはその方が、不倫で誤魔化してなんとなくうまく暮らすより、人生を興味深く思えて面白いんだよね。誰も知らない答えを探すのは、趣味だから。

コツコツと仮説を立てながら、結婚と向き合いちぎってみるよ。

---

「夫婦だから一緒にやる」じゃなくて、  
「夫婦でいるために一緒にやらない」

はじめて本気で離婚を考えたのは、新婚旅行の道中だった。そう、まさに成田離婚。事件は、行きの飛行機の中で起こった。

行き先はグアムで、3時間の空の旅。最初の2時間は寝たりとか、スマホの中にダウンロードしてあった本などを読んで過ごしていたのだけど、あと1時間というあたりで、私たち夫婦は暇を持て余した。機内Wi-Fiの設備はなく、ネットを必要とする作業は何もできない。

すると彼が言った。

「美咲ちゃん、しりとりしよう」と。

成田離婚のキツカケは、まさかの、しりとりだった。

## ——離婚危機を生んだ「しりとり事件」

着陸1時間前に始まったしりとりは、着陸するまで続いたのだけでも、なぜしりとりが夫婦の危機に発展したかというところ、まず第一に、彼が「る攻め」という技法を使ってきた。

※「る攻め」とは、自分の番が来たら「る」が語尾にくる言葉ばかりを言って、相手を「る」から始まる単語しか言えない状況に追い込み、早々にネタ切れさせるやり方である。

それ自体は、私にとって大きな問題ではない。る攻めをやる男子なんてのは多い。これまでも何度も出会ってきた。とくに年子の弟にはよくやられていた。

ただ、私にとって、しりとりは勝負ではなく、言葉遊びであり、お互いのボキャブラリーを楽しむものであって、「えーそんな言葉選ぶんだ！（笑）」とか！「そのキャラで、コアラ、とか言うの可愛い」とか！

そういう、なんか和めるコミュニケーションであって、娯楽だから、正直「る攻め」をする人の気持ちは分らないし、「しりとりで勝とうとするなんて、キモいな」と思うところはあって、そういうことをしない人の方がオツだと思うし、色気を感じる。大人なんだから、る攻めなんかしなくても単語が尽きないくらい語彙を豊富に携えててくれよ。

だから、る攻め男子に出会うたび、「大人げも可愛げもないやり方だな…」とは思っただけど、る攻めで来られた時は、仕方がないので、私もる攻め寄りにして応戦する。萎えるけど。つまらない方の試合にはなるけど、まあ、この世代（平成一桁）は、る攻めを使う輩は多い。

そうして、機内で新婚夫婦が始めたしりとりは、る攻め縛りの方向へと流れた。

る攻めが始まって15分もすると（すでに長い）、お互いにだいたいネタが尽きてきて、すると彼が、よく分からない外国人の名前のようなものを入れてきた。

それで「それ、何？」と訊くと、「○○○という神話に出てくる○○○という賢者」みたいなことを言う。

一度目は、まあ、良かった。  
が、二度目、三度目と、その神話（もしくは歴史）の人名パターンが重なってきた時に、  
思わず

## 「さや、知らねーよ」

という柄にもない言葉遣いのフレーズが、私の心にこだました。

それで声に出して「いや、知らないし、そこまでドマイナーなのってありなの？」と訊くと、「固有名詞ありなんですよ。美咲ちゃんが先に出したんじゃないん」と言う。

たしかに私は、少し前に「ルベル」と言った。

ルベルというのは、主に美容室専売品を取り扱う美容メーカーの名前なのだけど、それは、彼がかつて美容師だった経歴を踏まえて『知っているだろう』という前提のもと、放ったものだ。そして実際に、彼はルベルを知っていた。

「美咲ちゃん、ルベルなんて知ってるんだ！」「うん、サロンモデル歴が長かったからね！」なんてやり取りができて、これは良きしりとりの在り方だった。

それとこれを、この人は、一緒だと思うのか。

ここは空の上で、インターネットの環境もなく、出てきた単語を知らなかった場合に検索をかけることもできないわけで。

その状況で、そんなドマイナーな人名って…**本当にいるの？ そんな人。本当にあるの？ そんな本。**という不信任が募る。いなかったとして、適当に作った名前だったとしても、この状況だとまかり通ってしまう。

というか、そういう状況だからこそ、相手が知らない言葉は暗黙の了解で選ばないようにするのが、性格の良さであり、器の大きさってもんじゃないのか。私は、そうしてるんだけど。という悶々とした想いが、モクモクと燦る。

しかしながら、ただのしりとり。

別に何かを賭けてやってるわけでもないし、目くじらを立てるほどのことでもない。だから、よく分からない賢者やら勇者が出てきても「それ誰？ ふーん、そうなんだ」という確認のみで自分のターンに取り組んでいた。

一方で私は、ドマイナーな言葉は使わないようにしていた。

相手にとって、存在するのかもしれないのかもしれないような言葉を選ぶのは、しりとり楽しさを壊す行為に思えるから、生理的に、私はそれができない。「ルーム」の次に「ルームウェア」と言い「ルームシェア」まで言っちゃう程度の、三段活用くらいに留めていた。

そして45分が経過し、飛行機が着陸態勢になりつつある頃、「る」がかなり尽きてきて。とはいえ、頑張つて探せば見つかるため、少し時間をかけながら考えていると彼が言った。「もう負けを認めなよ」と。

体内でコルチゾール（ストレスホルモン）が分泌するのを感じた。感覚的には噴射してる。勝ち負けよりも、『私、こういうやり方、嫌い…こういうやり方する人、すごく嫌い…』

という絶望感の方が、私の中で目立ちすぎている。

それで、「いやー…ていうか、なんか、しりとりをやつてると、あなたの性格の嫌なところしか出てこないから、もうやりたくない。悪いところばかり出てくる」と言うのと、「え、なんでよ。じゃあ美咲ちゃんの負けね」と、この期に及んで決着をつけようとする夫。

「：負けるのがイヤとかはないけど、今のはさすがに、あなたのやり方が汚すぎて、負けたという実感を持ちづらい。謎の人物ばかり出されすぎて。勝ち負けをつけたいなら、相手も気分良く負けられるような勝負の仕方をするべきだと思うんだけど。さっきから、あなたの言ってることは、よく分からない。その言葉が実在するのかわかっても私は知らないし、そんな言葉ばかり出されても、なんか。人としてどうかと思う」

「なんでよ。負けを認めればいいだけの話じゃん。俺の方が語彙力があるんだよ」

この人は、語彙力をなんだと思っているのだろうか…と目眩がしながらも、ここで【語彙

力とは何ぞや」というテーマにまで話題を広げてしまうとカオスになるし、それを語彙力と定義するような人とその次元のことを議論するのはあまりにも不毛で無駄だし、それは置いておくとしても。

それ以前に、この一言にはツツコミどころが余りある。

「あのさ、そういう相手を落とす言動はしちゃダメだよって普段から言ってるよね。そういう物の言い方をしてると、家庭が崩壊するんだってば。もしも子どもが生まれて、そういう言動をする子に育ったら、いじめられかねないし。親になりたいなら気をつけて、って言ってるじゃん。仮にあなたの方が私より語彙力が高かったとして、それを、私にわざわざ言う意味、でしょ」

「どうしてそんな怒るの、冗談じゃん」

「冗談は、相手が笑えないと、冗談として機能してないから。それは冗談にもなっていないよ」

「美咲ちゃんは俺に負けたくないだけでしょ」

「私は、自分とあなたを、勝ち負けの概念で測ったこと自体がないよ、だってどうでもいい

いと思ってるから」

私がもし、夫との（というか他者との）間で順位や勝ち負けにこだわることもあるとしたら、賞金やら何かが懸かっている時だけであり、1位にならないと何かを逃す場合だけだ。

ここで勝っても何も手に入らないし、負けても何も逃さない時の、ただの勲章としての勝ち負けには一切関心がない。何ももらえないなら、とくに損をしないなら、どっちでもいい。

家庭内やカップル間で何かを競っても誰も何もくれないから、私は彼をライバル視したことなどないし、

むしろ我々はチームではないのか。

優れてる能力は貸して、足りない能力は借りて、二人の人生がうまくいくようにサポートし合う間柄なのではないのか。

「もし、これが飲み会で、あなたがたまたま隣に座った男であれば『負けたー、強いねー』って言って、サツと席を移動して二度とその人の隣に座らないか、帰るよ私は。しりとりで負けることも、負けた、と思われることも私にとってはどちらでもいいことで、ただ『嫌な奴だな、性格悪いな、関わりたくないな、クソキモいな』って思うから、帰る。そんな人からは離れたい」

私がそう言うと、夫は絶句していた。

「しりとりは、あなたの性格の嫌なところしか出ないから、もう一生やりたくない。

勝ち負けの問題じゃなくて、そういうやり方をされると、つまらないし、嫌いになる。負けにかかってくるとしても、楽しめるしりとりをしてくれる人っているもん。ただごあなたは違う。あなたとはもう二度としりとりをしたくない。しりとりをするくらいなら離婚がしたい」

## ——離婚のトリガーは沢山ある

そんなわけで、概ねうまくいっている私たち夫婦にも合わないところはある。

離婚のトリガーになるような相性の不一致ポイントは沢山ある。

つい先日、結婚10年が近づく中で初めて夫とオセロをする機会があり、その時にも「あなたとオセロをするくらいなら離婚がしたい」となった。

私たちに夫婦にとってゲームは鬼門であると、改めて確信した。

これはほんの一例で、私は夫について、好きなところと同じくらい、嫌いなところやキモくて無理なところもいっぱいある。

けっこう致命的なところかというと、まず会話の相性も悪い。

夫と話すと、何の話題であれ、返ってくる言葉に「人として三流すぎるだろ…」「その問題を捉える解像度が粗い…話にならない…」「いちいち発想がグスい…」と思わされるため、語り合うような会話はしないように細心の注意を払って暮らしている。仕事の相談

とか、したくない相手 No.1 すぎる。だからこそ思う。

けっこう合わなくても、合わないところをシェアしなければ、わりと大丈夫なのだ。

なんでもかんでも夫婦でやろうとしなければ、自分がやりたいことの全てを配偶者で満たそうとしなければ、トリガーは存在していても、それに干渉しないように暮らせば、問題にならない。

必ずしも夫婦でやらなきゃいけないことなんて、あまりない。

ほとんどのことは、夫婦間での相性が悪ければ、その件については他の人材を立ててやりたいことをするってことができる。

私は夫の全てが好きなのではない。嫌いな面もたっくさんある。

ただ、別にこれをやらなきゃ相手のそういう面に触れないで済む、というようなことは、もう二度とそれをやらなきゃいいだけだし、結婚生活に必要なのは、我慢でも妥協でも情性でも仮面でもなく、そういう工夫とか交通整理だと思っている。

「あなたのここは嫌いだわ！じゃ、もう二度とこれと一緒にするのはやめておこうね！キモすぎて無理！そういう面を多く浴びちゃうと離婚したくなっちゃうわ！」っていうスタンス。分かり合うことも必要ない。

私たち夫婦でいえば、まともに向き合うと分かり合えない部分の方が多い。

ただ、夫には、話が合うとかそういうんじゃない魅力があるから、私はこの人と一緒にいることを10年間選び続けている。

結婚するほど好き合っている二人だって、すべての相性が抜群なわけじゃない。合うところと同じくらいか、それ以上に、合わないところだって大量にある。

人生は適材適所。思考停止で「夫婦なんだから」と何もかもと一緒にやろうとせず、「夫婦であるために」やらないことを決めていくことも、健全なる夫婦運営に必要なことで、すぐく愛だと思っている。